

シリーズ・**病院**

神奈川県立こども医療センター

馬場直子

神奈川県立こども医療センターは、高度かつ困難な病気の診断・治療を包括的に行うという趣旨の下、小児総合医療・福祉機関として1970年に設立されました。こども専門病院としては、国立小児病院（現国立成育医療センター）に次いで古く、全国で2番目に設立されたそうです。病院の他に、肢体不自由児施設、重症心身障害児施設、県立養護学校が併設されており、長期入院患児の義務教育も行っています。その後、1977年に、こどもの心の病気を専門に扱う精神療育部が設置され、1992年にはハイリスク妊婦の妊娠と分娩、未熟児や病気の新生児の治療を目的とした周産期医療部が設置されました。

また、小児科診療の卒後研修の場として毎年4名のジュニアレジデントを全国から公募し、全科ロー

テイト制・全寮制で充実した研修医生活を送っていたが、卒業生がセンター内外で活躍しておられることも特筆すべきことです。

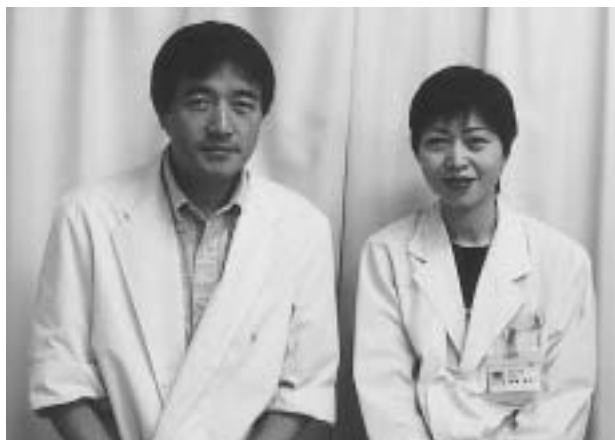
皮膚科は、開設以来24年間孤軍奮闘して来られた大先輩、齋藤胤曠部長に代わって、1994年より馬場が引き継いだ訳ですが、僅か1人しかいない最も零細な肩身の狭い科です。大学病院の大所帯から赴任してきた直後は、相談相手もなく、何でも1人で考え決断しなければならないことに戸惑いと不安がありました。また、初めてお目に掛かる、病名を聞いてもすぐにはピンとこない遺伝病の併診がちょくちょくあり、小児科の教科書と首っ引きで四苦八苦したものでした。1人で24年間も頑張ってきた齋藤先生の偉大さが身に染みて感じられたものです。



私は常勤で赴任してくる3年前から、非常勤として週1日手伝いに来ていましたが、その頃から齋藤先生と一緒に血管腫のダイレーザー治療を開始していました。レーザー治療は、その頃はまだ大学でも行われていなかったので全く経験がなく、他施設へ見学に行ったり、麻酔の方法なども方々へ尋ねながら試行錯誤で始めました。

こどものレーザー治療は、鎮静の困難さがあるためか、県内でやっているところが少なく、ポートワイン母斑のこどもがこんなにいたのかと驚くほど集まっています。

外来で最も患者数が多い疾患は、やはりアトピー



木曜日、横浜市大医局長の和田先生と。唯一、相談相手が来てくださる貴重な日です

性皮膚炎ですが、それと並んで多いのが母斑・母斑症・血管腫群である点が小児病院の特徴と言えるかと思います。

目下の悩みは、何をやっても治らない全頭型の円形脱毛症とB型の尋常性白斑のこども数名です。患児と親御さんの日々の心労を思うと何とかしてあげたいと切実に感じるのですが、これほど無力感に苛まれることはありません。何かいい方法をご存知の方はご教示ください。

外来診療は月水木金の午前。木曜日は横浜市大から医局長の和田秀文先生が来てくださって大助かりです。午後は外来小手術や入院患者の往診、木曜午後は中央手術室での手術やレーザー治療を行っています。1人医長は熱が出て休むことができず、院内の委員会や会議なども年々増え、手術やレーザー治療にも追われ、あっという間の1週間、1ヵ月、1年が過ぎて行きます。気がついたらもう9年目に入りました。だんだん大人の皮膚病からは遠ざかって行くように感じます。今となっては齋藤先生のようにこのまま定年までここにいるしかないかなと最近思っています。かわいいこどもたちとの会話や成長ぶりを励みに、縁あってこども医療センターに勤務できたことを幸せに思うこの頃です。

日本鋼管病院

小川純己

川崎市川崎区は20万人の人口を抱える地区ですが、1つの行政管区に6つの病院が林立しています。太田総合病院、総合新川橋病院、日本鋼管病院、川崎市立川崎病院、川崎社会保険病院、川崎協同病院の6つです。

その中で日本鋼管病院は、昭和12年に川崎市初の総合病院として日本鋼管株式会社（現NKK）によって創立されました。

企業病院ではありますが、創立当初より“地域社会への貢献”を基本理念に、一貫して地域に開かれ

た病院として医療活動を続けてきました。現在では入院・外来共に90%がNKK以外の一般患者さんです。

ご存じの通り、親会社たるNKKは、平成13年4月に川崎製鉄と合併してJFEグループという名称に変わることを発表しました。街の看板もJFEという3文字会社に変わりつつあります。本院の名称の行く末も興味あるところですが、先行したUで始まるアミューズメントパークや銀行の雲行きがいまいちな分、少々心配です。

日本鋼管病院自体のトピックとして、療養型病棟の開棟、新外来病棟の建設があります。

介護療養病棟はこの秋よりオープンしました。日本鋼管病院では積極的に訪問看護に取り組んでおり、「こうかん訪問看護ステーション」が窓口となって自宅療養や介護のサポート業務を行っています。介護療養病棟では、看護サービスを行っている患者さんのショートステイ受け入れなど、能力に応じた在宅日常生活を営むことができるように、リハビリ、看護、介護支援をしています。皮膚科も訪問看護ステーションより依頼を受けて、週1回ペースで往診しています。

もう1つのトピックは、新外来病棟の建設です。中庭あり、ロの字型という欧風建築様式(?)の外來棟は、現在でも立派に最新の医療を提供してはいますが、建物の老朽化は免れえません。現在、鋼管通りに面したテニスコートと駐車場は、新外来病棟建設のため取り壊しとなり、新棟建築の工事が着々と進められています。患者さんのプライバシーに配慮した、静かで癒しのある外來を目指して工夫を凝らした設計となっています。皆様の前にお目見えするのは平成15年の秋頃になる予定です。

皮膚科のスタッフも若返りを図り、平成14年7月より、小川純己と高 理佳の2人体制となりました。若いパワーで皮膚科のIT化に取りかかり、まずは臨床に還元しやすいものをと、デジタルカメラの運用を始めました。光学カメラをただデジタルに置き換えるだけではない、デジカメ独自の使い方を工夫



右が高 理佳先生、左が私

しています。病棟依頼など往診の時は必ずデジカメを白衣のポケットに忍ばせておき、褥瘡評価時の記録を撮ったり、他科の患者データ(カルテ、検査値、画像など)を撮し込んでメモ代わりにしたりします。外來にはメディア(コンパクトフラッシュやスマートメディア、メモリースティックなど)からコンピュータを介することなしに直接印刷できるプリンタを置き、積極的にプリントアウトしてカルテに貼込みます。褥瘡対策委員の看護師にもコピーを配布し、画像情報を共有するようにしています。評判は上々で、病棟のポラロイドが駆逐されつつあります。

平成14年秋現在では、大通りに面した部分で大々的に工事をしているため、病院は休業していると思われる節がありますが、通常通り病院はフル稼働しています。今は文字通過渡期にあたるのですが、社名共々イメージチェンジを図る15年秋の日本鋼管病院にどうぞご期待下さい。



新外来クリニック棟完成予想図